

## 体験活動に関するアンケート調査集計 (教育センター研修員へのアンケート)

本編 研究の内容 4 自己効力感を高める体験活動の構想 (1)自己効力感を高める体験活動を構想する上での基本方針 ア「強い達成感を感じる体験」の特徴に関する資料  
内容別・学年別にみた傾向

### 内容区分

ボランティア活動など社会奉仕に関わる体験活動

(福祉施設訪問・介護体験活動・リサイクル活動・環境美化活動など)

自然に関わる体験活動

(自然の中での長期宿泊体験活動・身近な地域の自然を生かした探求活動など)

勤労生産に関する体験活動

(米や野菜作り・動物等の飼育など)

職場や就業に関わる体験活動

(地域の商店や事業所などでの体験活動・将来の進路を考えるインターンシップなど)

文化や芸術に関わる体験活動

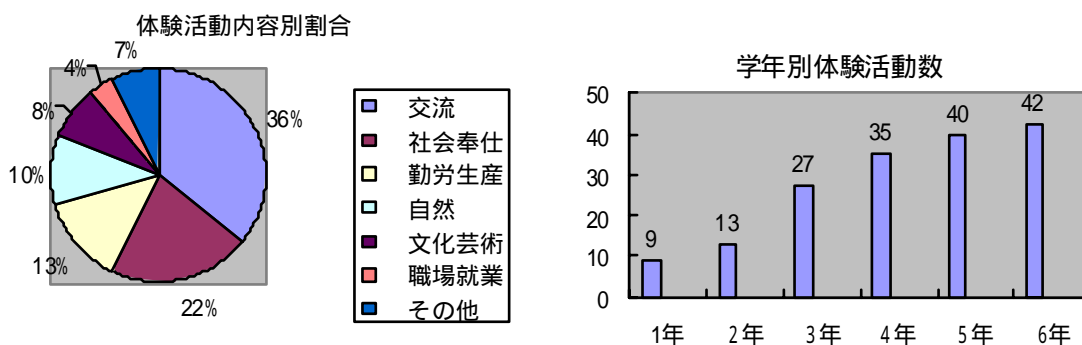
(地域に伝わる文化や芸能、伝統工芸等の伝承活動など)

交流に関わる体験活動

(地域の人々、高齢者、幼児、障害のある人々、外国の人々とのふれあい・農山漁村と都市部など異なる地域間での交流など)

その他の体験活動

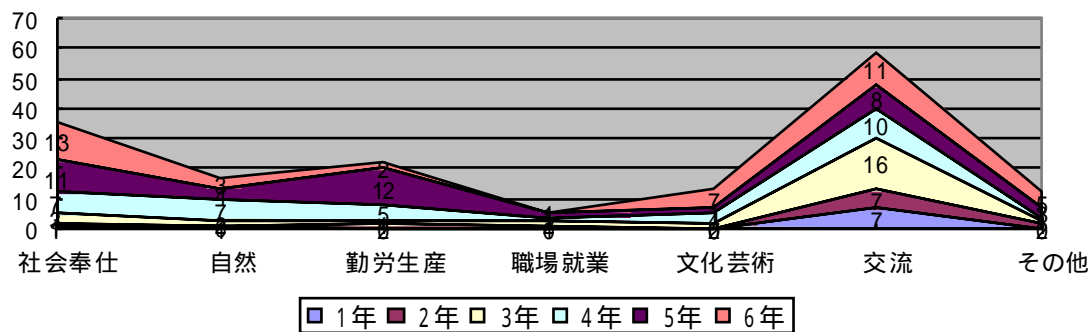
ねらいなどに応じて複合的な活動が行われていることも多く、収集した事例についても、複数の性格を有するもの(社会福祉施設に訪問し交流するなど)が見られた。そのような事例については、体験活動の対象や内容などの中から最も重要と考えられるものを基本に区分した。



交流に関わる活動と社会奉仕に関わる活動を合わせると全体の 58 % となり、また複合的な活動となっていることが多い。

体験数は上学年になるにしたがって増えており、1～4年では交流に関わる活動、5年では勤労生産・社会奉仕に関わる活動、6年では社会奉仕・交流に関わる活動が多い。

内容別・学年別体験活動数



社会奉仕に関わる活動は高学年が多い。 自然に関わる活動は4年生が多い。  
 勤労生産に関わる活動は5年生が多い。 職場就業に関わる活動は学年に関わらず平均的に少ない。  
 文化芸術に関わる活動は6年生が多い。 交流に関わる活動は、全ての学年で多い。

#### 体験活動のねらいから見た傾向

教育課程内の体験活動について構想する視点から、ねらいを以下の4点とした。

##### ・基礎的、基本的内容の定着を図る

体験により「ああそうだったのか」とうなずきながら学ぶこと、つまり抽象化された理屈を受け入れ覚え込む以外の手だてによって学ぶことにより、実感的な理解や思考となり、学習内容をしっかりと定着させることができると考える。

##### ・人間性の育成を図る

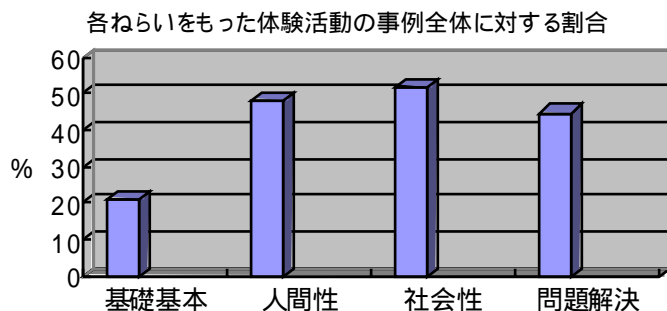
自然の偉大さや美しさに出会ったり、現実の社会に直面し人とかかわったりすることで、子どもたちは大きな感動や畏敬の念、あるいは挫折などの心の体験を通して、自らの人間性を豊かにするとともに、どう行動しふるまうか、どう生きるかといった価値の選択能力を育むことができると考える。

##### ・社会性の育成を図る

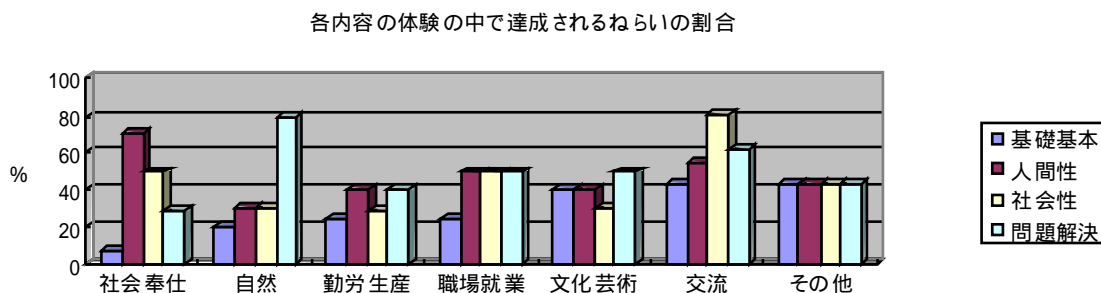
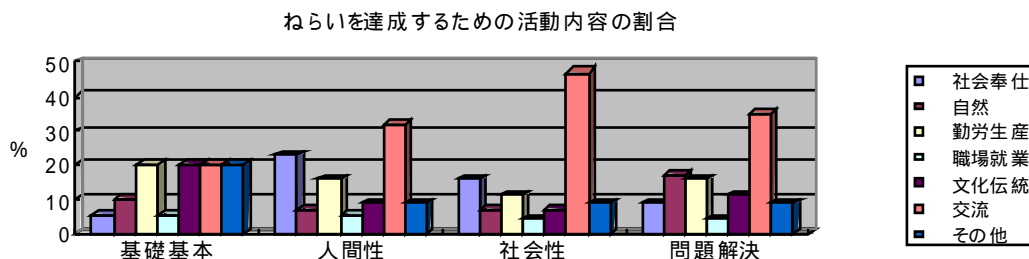
自然や社会や人々とのかかわりの中で展開される体験活動を通じ、子どもたちは地域社会等の実際の生活に役割を持って参加し、社会規範や社会貢献の在り方、自他の権利の尊重、人としての暮らし方やふるまい方等を学ぶことができると考える。

##### ・問題解決力の育成を図る

周囲の環境とのかかわり、興味や関心の中から疑問や問題意識が生じ、問題解決へと導かれ、その過程として学習が組織される。問題解決的に体験活動に取り組むことで、何をどうすれば問題が解決するのか、その見方、考え方、迫り方といった能力や態度などを育てることができると考える。



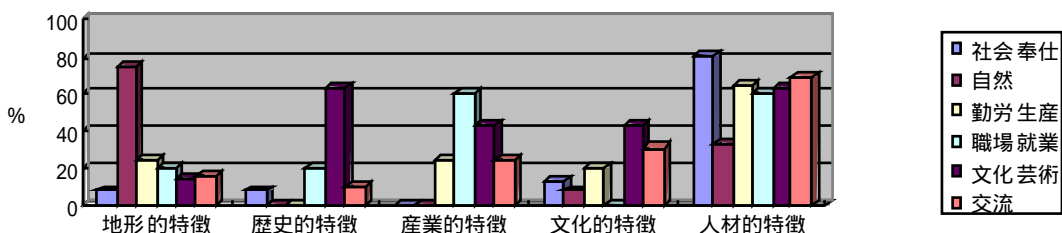
全事例の 52%は社会性の育成を目指した体験である。またそのうち 54%は人間性の育成を、35%は問題解決力の育成をも目指した体験である。



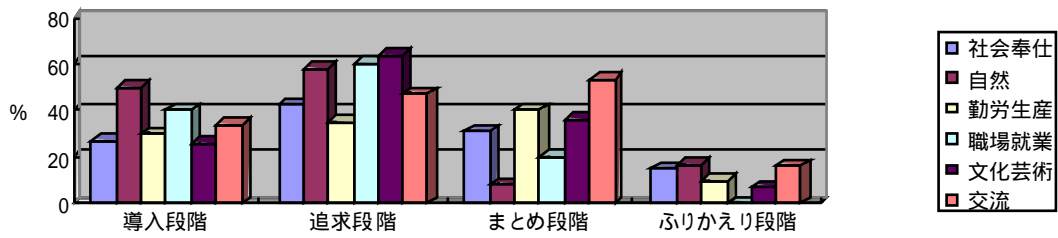
### 体験活動分析の視点の達成されやすさの傾向

今回の学習指導要領の改訂は、完全学校週5日制の下、各学校がゆとりの中で特色ある教育を展開し、児童に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの生きる力を育成することを基本的なねらいとしている。ゆとりとは、子どもたちがやっていることに没頭できる時間ととらえることができる。授業時数の減少、指導内容の精選という現実の中で、子どもたちが没頭できるものをどうとらえ、どう実践していくかが、各学校の大きな課題となっている。そんな中で一つの体験がより多くの意味をもったものになるよう視点を定め、より効果的な体験が明確になるよう分析をしたり、体験を再構築したりすることで、子どもたちが没頭できる体験とすることが大切であると考え。そこで、各視点が達成されやすい内容と学年について、各内容・各学年の体験の実数に対する達成率で明らかにした。

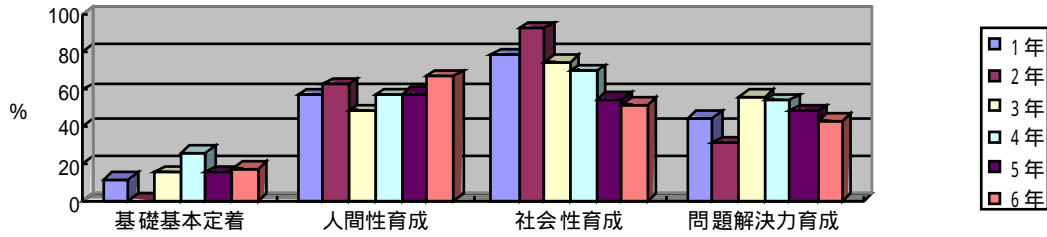
各内容の体験活動の中で地域の各特徴が活用される割合



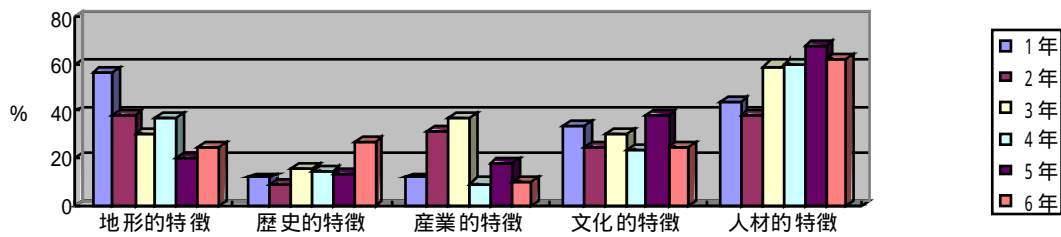
各内容の体験活動が各学習過程で行われている割合



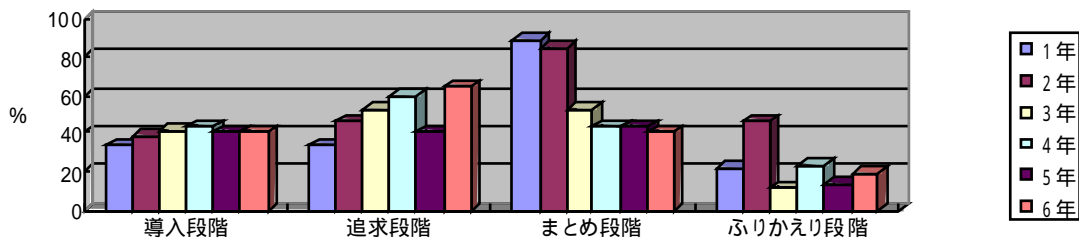
各学年の体験活動の中で各ねらいが達成される割合



各学年の体験活動の中で地域の各特長が活用される割合



各学年の体験活動が各学習過程で行われる割合



体験活動分析の視点		最も効果的に視点を達成する内容・学年・具体例		
目標	基礎的基本的な内容の定着を図る	職場就業に関わる活動	4年	農作業見学・体験
	人間性の育成を図る	社会奉仕に関わる活動	6年	福祉体験・施設訪問
	社会性の育成を図る	交流に関わる活動	2年	町たんけん・お祭り
	問題解決力の育成を図る	自然に関わる活動	3年	自然観察(公園・川)
地域連携	地形的特徴を活用している	自然に関わる活動	1年	自然物の遊び道具
	歴史的特徴を活用している	文化芸術に関わる活動	6年	室町文化体験・土器作り
	産業的特徴を活用している	職場就業に関わる活動	3年	工場見学
	文化的特徴を活用している	文化芸術に関わる活動	5年	伝統工芸品作り

学 習 過 程	人材の特徴を活用している	社会奉仕に関わる活動	5年	福祉体験・施設訪問
	導入段階を充実させている	自然に関わる活動	4年	川調べ・野鳥探し
	追求段階を充実させている	文化芸術に関わる活動	6年	室町文化体験・土器作り
	まとめ段階を充実させている	交流に関わる活動	1年	祖父母と秋遊び
	ふりかえり段階を充実させている	交流に関わる活動	2年	町たんけん

